

WAY プロジェクト（校内道德教育推進委員会）レポート・4

2019・9／26（木）

今回は地域からPTA会長の石口さんにもご参加いただき、深い議論が繰り広げられました。

C11

正義と公平さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること（公平、公正、社会正義）

前回もこの内容項目について、社会における「正義」とは何か。そしてその「正義」と関連し「善」とは何かということを議論した。

今回は引き続き「本校における正義とは何か」「本校における公平、公正とは何か」というテーマについて議論をした。

まず「あの子ばかり～」や「あの子だけ～」という言葉を目にするが、この言葉に込められている真意は何かということが議題に上がった。例えば、支援を必要としている生徒の場合はどうなるのか。その生徒は特別な存在なのか。その時公平、不公平はどのようなことになるのかという話し合いになった。

そこで「3つの箱」という話が例に出された。内容としては次の通りである。ここに3人の人間（仮にA、B、Cとする）がいる。その3人は壁の前に立っている。Aは壁よりも背が高く簡単に壁の向こう側を見ることができる。Bは壁よりも身長が低い、もう少しで壁の向こう側を見ることができる。CはBよりもさらに身長が低く、全く壁の向こう側を見ることができない。そこで3つの箱がある。その3つの箱をそれぞれに1つずつ与えるということが公平ではなく、Aに2つ、Bに1つ与えそれぞれが同じ視線の高さになるようにすることこそが、本当の公平といえるので

はないかという例である。

本校にこの話を置き換えると
するならば、勉強が得意な生徒、
勉強が得意でも苦手でもない生
徒、勉強が苦手な生徒。それぞれ
に同じ授業をするのではなく、そ
れぞれにあった授業をし、生徒全員が同じ立場になれるようにす
ることが本当の公平であり、重要ではないかということが結論と
して出された。



C 1 2

社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること（社会参画、公共の精神）

まず、社会参画というのはどのような意識から芽生えていくの
だろうかという議題になった。若い頃は、自分自身が住んでいる
地域の清掃活動など「誰かがやってくれるだろう」という意識を
持ち、あまり興味関心もないため、そういった地域活動などに参
加したりすることがあまりない。

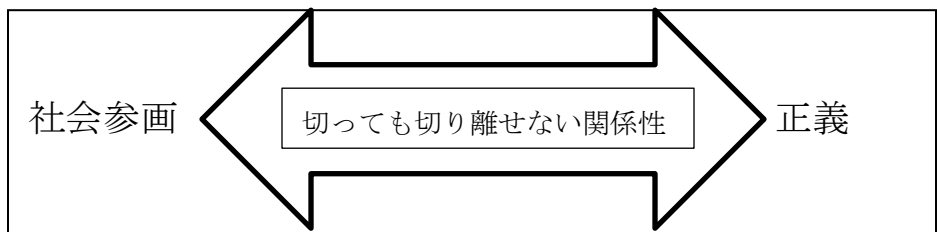
しかしある時、その「誰かがやってくれるだろう」といった意識
が、「自分がやらなければならない」といった意識に変わり、地
域の清掃活動等に参加するようになるのである。その意識の変化
というのが社会、そして地域の一員であるという自覚に繋がるの

ではないか。そしてその意識の変化は何をきっかけとして生まれるのか。そのきっかけとして上がったのが損得感情、自分がそれをする必要性、社会との関係性を実感したときなど等さまざまな意見が上がった。

この件を本校でのことに置き換えてみる。例えば清掃時間のできごとだが、本校では生活班がそれぞれの清掃場所に分かれ、そこに一人教員が付き、15分間の清掃を毎日行うことになっている。しかし予定よりも短い時間で清掃を終えてしまうことや、清掃をせず友達とずっと話していたり、清掃場所に来ないこともある。その場合生徒達には先述した「誰かがやってくれるだろう」という意識があるのではないかと考える。その生徒達の意識をどのようにして変える授業をすればよいのかは今後の課題ではないかと考えている。

そもそも社会参画とは何なのか。ということ考えたときに、前項にあった正義というものと結びつくのではないかとということが考えられる。社会参画とは自分自身一人一人が社会という大きなものの中でみんなのために何ができるのか。という意識の元になりたっているものであり、それぞれの正義に基づいて行動することが社会参画に繋がるのではないかと考えられるためである。

つまり社会参画と正義は切っても切り離せない関係性にあるのではないかという結論に至った。



今回も今まで同様に白熱した議論が繰り広げられたのだが、時間いっぱいとなってしまった。次回はC13「勤労」の項からWAYプロジェクトで議論をしていく。